

---

# 白銀の翼

赤流星

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白銀の翼

### 【Nコード】

N6005V

### 【作者名】

赤流星

### 【あらすじ】

2025年、人体の思念によって個体、液体、気体、果てにはエネルギーなど、さまざまな変化を見せる特殊な粒子、フォトン粒子が発見された。

その2年後、思念によってフォトン粒子の形質を変えるシステム。「フォトン変換システム」

が開発され、人々の生活はより高度なものへと進化してから15年

の月日がたった。

2042年

田舎の町に住む少年、焰ほむら 恭一きょういちは、  
自分の母から『工業特区』にある学校、三原学園への入学推薦状  
と、一枚のカードを渡される。  
母の行動に疑問を持つ恭一であったが、少しの荷物と推薦状、そし  
てカードを持ち、故郷の町を離れ  
転校することとなった。

恭一が高校に足を踏み入れた途端、30年前から続くある計画が、  
ひっそりと動き出した…

## プロローグ（前書き）

### 読者様への注意

赤流星です。このたびはこの作品に興味を持ちクリックして下さったことに感謝しつつ、注意をさせていただきます。

注意1 誤字、脱字、スペルミス

私はときたまに変なミスをすることがあります。

もし発見された方は感想などで知らせてくれると助かります。

注意2 更新スピード

私はまだ学生なので、課題や行事の時は更新できません  
ご了承ください。

注意3 文法

私はあまり気にせず打っていますが、「ここ変じゃね?」と思ったところがあればお知らせください。

以上です。それでは白銀の翼をお楽しみください！

## プロローグ

2025年、信号によって個体、液体、気体、果てにはエネルギーなど、

さまざまな変化を見せる特殊な粒子、フォトン粒子が発見された。

その2年後、信号によってフォトン粒子を変えるシステム。

「フォトン変換システム」

が開発され、人々の生活はより高度なものへと進化してから15年の月日がたった。

2052年

田舎の町に住む少年、焰ほむら 恭一きょういちは、

自分の母から『工業特区』にある学校、三原学園への入学推薦状と、一枚のカードを渡される。

母の行動に疑問を持つ恭一であったが、少しの荷物と推薦状、そしてカードを持ち、故郷の町を離れて転校することとなった。

恭一が高校に足を踏み入れた途端、30年前から続くある計画が、ひっそりと動き出した…

## 第一話 少年、転校する。 1 - 1 (前書き)

長いので5分割か6分割くらいになるかもです。  
長いけどよろしく！

## 第一話 少年、転校する。 1 - 1

プロローグ 少年、転校する。

うだるような暑さの中、携帯電話型のPDA（個人用携帯用情報端末）を片手に小ささまざまなビルに囲まれた道を歩く一人の少年がいた。

「暑いなあまったく、こっちはこんなに暑くなるのか」

汗を首にかけたタオルで拭きながらとぼとぼと歩く、平日の昼間だからか人は見当たらない。PDAを操作しながら背中に担いだ荷物を持ち直しつぶやく。そのときPDAが女性の声を発した。

『主人、この先100m先を右に曲がって』

携帯上部のLED電球を黄色に光らせて話す。

「そろそろか、あっちの街から7時間もかかったな」

少年は顔をあげ、約三週間前のことを思い出していた。

（三週間前）

少年の名前は焰ほむひ 恭一きょういち、どこにでもいるただの高校生だった。成績、運動関連ともに平凡、抜きんでた才能もないただの学生。そんな恭一の生活が壊れたのはその日だった。その日、恭一は担任の阿部教諭にほとんど呼ばれない職員室に呼び出された。

「阿部先生何の用で？手伝いならやりませんよ？」

「なんでお前はそうゆう方向にしか見れんのだ。俺だってまともに仕事しているぞ。」

阿部と言われた教諭は呆れながら恭一を見る。

「いつも俺に仕事手伝わせてるでしょ。だからですよ」

「一本取られたな、まったく。で、本題はこれだ」

そういつて阿部教諭は机の引き出しからA4サイズの茶封筒を取り出し、恭一に手渡した。

「これ、なんですか？」

「工業特区の学校への推薦状だ」

「……はあ？」

恭一は茶封筒の中身を引っ張り出し、中身を確認する。その中身は紛れもなく、工業特区の学校、三原学園への入学推薦状だった。他にも何か入っていないか確認すると、プラスチックのようなもので作ったカードと、向こうの研究所に住み込みで『研究している母からと思われる小さなメモリーチップが入っていた。

「どうやって再生するんだよこれ……」

「なんだ？こっちの機械じゃできないのか」

阿部教諭がチップを見ながら恭一に問いかけるが、恭一は首を横に振る。

「差し込み口が見たことない形だ、どこにさすタイプなんだ？」

『それは私のようなPADにさすチップですよ』

恭一が首をかしげていると、どこからか声が聞こえた。



「誰だ？…もしかして、このカードか？」

『カードとは失礼な、私は高性能カード型PAD、名称「セラフィム」ですよ！』

「自分でカードだつて言ってるじゃん」

『うぐ…』

恭一は自らを「セラフィム」と名乗り、目の前でふわふわと浮いているカードに目を移す。大きさは長方形、かなりの大きさがあり、手の取つてみると文庫本より少し小さいくらいだった。これも日本最大のフォトン粒子研究所、『粒子運用研究所』にて開発主任を任されている母、優子が作成したものだろう。恭一はカードを手で遊びながら母の送ってきた微妙な機械類を思い出した。

「まあ何か知らないが見てみますか」

恭一はカードの横のスロットを開きチップを入れると、表上部分にある丸い球体から光があふれて小さな画面を作り出した。画面の中では白衣のような研究服をまとった人たちがせわしく動いていた。しばらくするとカメラが横を向き、優子を映し出した。

《恭ちゃん久しぶり！、それと高校入試合格おめでと〜！でも残念！恭ちゃんには工業特化区の三原学園に強制的に入学してもらいま〜す。理由は簡単、恭ちゃんがそのカード、セラフィムの使用者に選ばれたからです！使用者を選ぶという点については説明できません！国家機密つてやつだからね！しょうがないね！というわけであちらさんとの話はついてます！それではね〜！》

「……………なんじゃそりゃー！」

その後、入学の取り消しやクラスの皆にもみくちやにされたり荷物

の整理などのごたごたがあり、今に至っている…

## 第一話 少年、転校する。 1 - 2

そして今、恭一は工業特化区の南西部、通称『三原地区』と呼ばれる地域にいた。

彼の住んでいた町からおよそ7時間、今ではあまり見られなくなった電車やタクシーなどを乗り継ぎながら、恭一は目的地の三原学園寮を目指していた。

「…ふう、次はどっちだ？」

恭一は3週間の間に作っておいたPAD対応型の携帯電話を操作し、周辺の地図を見ながら歩き続ける。母からもらったカードセラフィムのメインとなる部分『アクティブメモリ』を差し込むことができるのだ。もっともセラフィムだけで事足りるのだが、恭一の「カードに喋ってるのっておかしく見えない？」という考えから急ぎよ作成したものだった。

『その角を左に曲がると学校と一緒に見えるはずですよ』

「ん…あのやけにでかい建物がそうか？」

恭一が見たものは今まで通っていた学校とは少し違っていた。

やけにでかく、広い、学園寮と思われる建物もなかなかのものだ。だがとりあえずは学生寮に入り、自分の部屋に荷物を置かなければならない。恭一は意を決して少し離れた校門へ向かう。

「君は入学者か？もしそうだったら生徒証を見せてくれるか？」

「あ、はいわかりました」

恭一は門番をしている恰幅のいい男性に携帯の液晶に表示した生

徒証を見せる。

「OK、ま、4年間頑張れよ若人！」

「はい、ありがとうございます」

恭一は少し離れた学生寮に向かう。

入学生徒用のパンフレットに書かれていた部屋番号を探し、エレベーターで移動する。

「132…132……ここだな」

ドアのキーを鍵穴に差し入れ、部屋の中に入る。

「ウワーオ……」

部屋の中はとても綺麗だった。それもあり得ないほどに。

家具などは持参するため殺風景な部屋だが、小さいキッチンとシャワールーム、トイレも完備。

「これは…きついな…」

生まれも育ちもオンボロ屋敷な恭一にとって、ここまで綺麗だと逆に息苦しくなる。

こんなこじやれた部屋に4年か…と思いながらも、輸送してもらった家具と少しの荷物をかたずける。

荷物はとも少なかったため、30分ほどで終わってしまったのでテレビでもつけて暇をつぶすことした。

「番組の数多いな…あっちじゃ4チャンネルくらいしかなかったのに」

ふと時計を見るとも6時を過ぎようとしていた。ちょうどいいと思いつながらキッチンに持ってきた荷物の中から取り出したラーメンでも作ろうと乾燥めんと野菜と調理道具を取り出す。フライパンに油を少し入れ、フライパンにまんべんなくいきわたるように回す。

油を温める間、野菜を切り揃え、鍋に水を入れて火にかける。

火の通りにくいものから順に入れ、片手で混ぜながらめんの準備。

鍋にめんを入れ、ほぐすように箸を動かす。炒めていた野菜はコシヨウで味と香りをつけて火を止める。

スープはすぐには作れないため持ってきていた粉スープをお湯に溶かしこみ準備OK。

めんをお碗の中に入れ、スープを流し込む。最後に野菜炒めをのせれば完成。

（ピンポン）

「誰だよまったく…」

部屋の呼び鈴が鳴り、恭一は仕方なくでることにした。恭一が扉を開けると一人の少年がぼつんと立っていた

「誰だ？今食事中なんだが…」

「すまんお隣さん！…ご飯食べさせてくれねえ？」

「…は？」

~~~~~

「はあ、うまかった！ありがとな！」

「別にいいさ、また作ればいいんだし」

あの後恭一は仕方なく先ほど作ったラーメンを”お隣さん”に食べさせた。

”お隣さん”は相当おなかが減っていたらしく、すぐに食べ切りおかわりを要求してきた。

「今日も厄日だなあ」と考えながら少年に尋ねる。

「なあ、あんたの名前は？」

「俺は南！南 みなみかすき 一樹っていうんだ。今年入学で部屋の番号は133」

恭一が南一樹と名乗った少年から話を聞くと、彼は三日前からこの寮に来ていたらしい。

初めは食料があったらしいが二日目に無くなり、買いに行こうとしたら部屋が開かなかったらしい。

「立てつけが悪かったみたいでな、その後いろいろしてたんだけど全然あかなくてな！まああんたが来てくれて助かったよ」

「そりやどうも。俺は焰恭一、あんたと同じ一年だよ」

「へえ、どっから来たん？」

「神明市」

「どんなところ？」

また作ったラーメンをすすりながら、一樹の質問に答える恭一。  
なんとなくだが彼とは長い付き合いになるだろうという予感を胸に、

都会入り一日目の夜は過ぎて行った…

## 第一話 少年、転校する。 1 - 3

〓〓〓次の日〓〓

「…ん」

窓からさす朝日に目を細めながら恭一は立ち上がった。

近くにおいていた目ざまし時計を手に取り時間を確認する。現在の時間は7時、投稿の時間は9時なためまだまだ時間はある。恭一はまず目をちゃんと覚まそうとシャワー室へ。

恭一は朝は弱いほうなのでいつも意識をはっきりさせるためシャワーを浴びるようにしているのだ。

数分シャワーを浴びた後髪を乾かしながら朝食の準備、ちょっと時間がないため簡単に作れるものを考える。

「パンでなんか作るかな…」

そういつて荷物の中からパンと備え付けの冷蔵庫に入れておいた卵を2、3個取り出す。そういえばポストか何かなかったかと思い玄関へ、玄関のすぐ横、ポストらしきもののふたを開けると小さなケースが置いてあった。

「なんなんだろ……まいつか」

小さなケースは一応後で中身を確認しようと思い鞆の中へ放り込む。朝食を作り始める前に布団を片付けようと手を伸ばすと…

「…ん？」



恭一が目を向けた先にある布団、その布団がうねうねとうごめいていたのだ。

「……………」

一瞬思考が停止し固まっていたが、ハッと我に返り布団を引きはがす。

するとそこにいたのは…

「…ううゝ後5分…」

「…う起きろおおおおおおお！！！！」

そこにいたのは昨日知り合ったばかりのお隣さん。一樹が寝ていたのだ。

恭一はまず嫌がる一樹を布団から蹴り出し一喝。

「なんでお前が俺の布団の中に入って寝てるんだよ！」

「それは」

「どうせ（よく見たら寝具も持って来てないんだ。だから寝かしてくれね？）みたいな感じなんだろう！？」

「うおお、よくわかったな！」

「だろうな！そうだと思ったよ！」

恭一はとりあえず一樹を自分の部屋に戻らせ、朝食の準備を始める。

パンをトースターに入れて焼きはじめ、卵を割ってフライパンで焼き上げる。

卵は目玉焼きにして塩コショウで味付け。そしてそれをパンに乗せて出来上がり。

「うん、こんなんでいいか…」

朝食の準備はできたため、次は投稿する準備を始める。壁に干していた制服を着込み鞆を確認。筆記用具などもチェックした後、恭一は黙々とパンを食べ始めた。

少しして、一樹が慌てて部屋に入り朝食のパンにかぶりつく。

「ん、恭一のご飯ってめっちゃうまいな！家でも作ってたのか？」

「ん……まあな、母さんも姉さんも家事全般は全然ダメだったからな。必然的に俺がやらなきゃならなかった」

「へー、そーいや姉さんって言ったけど兄弟いんの？」

「姉と妹と弟一人ずつ…おっともうこんな時間だ、さっさと行くぞ」

軽く食器を洗い窓などの戸締の確認を済ませて部屋を出る。

恭一はこれから始まる学校生活に少し興奮しながら、入学式の会場へと歩いて行った。

恭一達は三原学園第一体育館にて入学式が始まるのを待っていた。あの後着いたはいいが少し早く来すぎた。新入生もまだちらほらと広い館内に見えるだけだった。

「ああそーだ恭一、後で俺の友達紹介するよ！ぜってー気に入る！」

「はいはい」

そっけない返事を返していると、突然PADから電子メール着信の

確認音楽が流れた。

先生方にあまり見られぬようこっそりと開いてみると、母からのメールだった。

《恭ちゃん、この前言ったセラフィムの戦闘用モジュール。完成したからそっちに送りました。黒のケースだからわかりやすいと思います。使い方は取扱い説明書読んでね》

「あれだったのか…メールすんの遅いぞ…っと」

少し不満を漏らしながらメールを返す。幸い式が始まる前だったの  
でいい暇つぶしになったようだ。

式が始まり、校長のやけに眠気をそそる声のせいで恭一はゆっくり  
と眠りの世界に落ちて行った

## 第一話 少年、転校する。 1 - 4

「俺が今日から1 - 3を担当することになった、川崎 結城だ！  
これからよろしく！！」

まばらな拍手が起こり、先生が大声を上げながら学校の説明を始める。

今は入学式が終わりクラス発表、そして担任紹介と順調に予定をクリアしているが、恭一は顔を伏せ終わるのを待っていた。

（やってられない…）

川崎結城と名乗った教員はいかにも熱血といった感じで、恭一が本当にここは世界の新技术が集まる工業特区なのかと怪しむ程に一般的なジャージに下駄、ネタでやっているとは思えない恰好であった。少しうるさい声を衣類でできるだけ聞こえなくして後ろを向くと、一樹がこちらを見ていたのでゆっくりと顔を戻した。

（ほんとに好かれてしまったな…餌付けしたのがまずかったか？）

そんなことを考えながら結城が初めに分けた学校紹介の電子パンフレットに目を通す。

この学校は高、大学一貫制、総勢1200名ほど、大きさは小さな町ほどあり大きな工業特区区一。その中に校舎、栽培場、模擬訓練場、技術棟などさまざまな施設が点在しており、高レベルの実験など行えるよう機材も最新機を取り揃えてある。

最初に建てられた粒子系専門学校ではあるが、近年入学希望者が減っている。

（別に書かなくってもいいんじゃないのか最後の文書…）

と、恭一がパンフレットを見ている間に話が終わったよう度。

「それでは今日は解散！また明日な！あ、あと気になる奴たらジャンジャン話せよ！高校生活はあと4年！友達作って楽しくな！」

と笑いながら結城は去って行つた。

その途端さまざまところで話し合いが起きる。一応の自己紹介はしたが、このクラスにもさまざまところから人が集まってきたため、さつき結城が言つたことも気になるのであるう。

恭一は別に気にもせず、荷物を片付け外に出ようとした。

「あ、待てって恭一！」

「なんだ南、俺は外に買い物行かなきゃだめだから手短に」

「友達紹介するって言つたろ！」

「…しかたねーな、ほれ」

恭一は胸ポケットをまさぐり寮の自室の鍵を一樹に渡す。

「入ってろ、すぐに戻るが部屋の物触んなよ」

「え…いいのか？」

「食つもん買ってきてやるから絶対に触るな、わかつたな？」

そういつて恭一は鞆を持ち、教室を出た。

~~~~~3時間後~~~~~

「少し遅くなったな…」

恭一はビニール袋を3つほど下げて歩道を歩く。周りは暗くなつてしまい、街灯のフォトンライトの光が道を照らす。

『マスター』

「どしたセラフィム」

『あの方を簡単に部屋に入れてよかったのですか？』  
「……………」

セラフィムからの質問に答えず、黙々と歩き続ける。

『マスター…………』

「…なんかな、悪い奴じゃねえと思うしいんじゃ？」

『…そうですね、悪さとかしなさそうなタイプですし』

「なんか盗んでも、「な、なんもとって、ねねねえよ?」みたいな

感じじゃね？」

「『……ハハハッ』」

『“お人よし”ですね、マスター』  
「そうなんだよねえ……」

ひとしきり笑った後は何事もなく部屋についた。ドアノブを握ると鍵が開いていたので、一樹とその友人がまだいるのかと思い、少し騒がしいことに文句をつけようと息を吸いながら戸を開けた。戸を開けるとそこには。

「『『『あ……』』』」

地獄がありました。

「……ふうー……はあー……ふうー……はあー」

「きつ、恭一、これにはだな、深い訳が」

「そ、そうそう焰君！ね、福家！」

「…観念しろ、俺はもう覚悟を決めた」

「えと、えと、ご、ごめんなさい……」

「高倉さん！たっ倒れないで！」

恭一が目にしたもの、それは。

「おまえら……」

昨日特化区へ着いたときに。





身まで触っていいとは言った覚えがないぞなんでこれなんだ他にも  
なんかあったるなんでよりによって買ってきておいたパフェなんだ  
よせつかくせつかく並んで買ったのに5000円近くするからかな  
り悩んで来月分の自由金まで使って買ったパフェが何でおれの部屋  
の床が食ってんの説明してよだれか早く説明してよ南にその並ん  
でる3人組なんでこうなったか一字一句丁寧にお詫びの気持ちを丹  
念にこめて説明してよ俺のいた町ではこんなもんないからこっち来  
たらすぐおいしそうな1つ食べようって決めてたんだぞそれをお  
前らが邪魔しくさってからにいい加減にしるよお前ら

お前ら部屋に入っていていいと確かに南には言ったが冷蔵庫の中身  
まで触っていいと言った覚えがないぞなんでこれなんだ他にもな  
んかあったるなんでよりによって買ってきておいたパフェなんだよ  
せつかくせつかく並んで買ったのに5000円近くするからかなり  
悩んで来月分の自由金まで使って買ったパフェが何でおれの部屋の  
床が食ってんの説明してよだれか早く説明してよ南にその並んで  
る3人組なんでこうなったか一字一句丁寧にお詫びの気持ちを丹念  
にこめて説明してよ俺のいた町ではこんなもんないからこっち来た  
らすぐおいしそうな1つ食べようって決めてたんだぞそれをお  
前らが邪魔しくさってからにいい加減にしるよお前ら……」

「ねえ一樹、これいつたいいつまで続くの？」

「少し前からずっと同じ言葉を繰り返して言っている……」

「いつまでって…恭一に聞けよ」

一樹と友人たちはあの後小一時間ずっと恭一から説教を受けてい  
た。

しかし恭一は怒ると会話がループするようで、ずっと同じことばか  
りを下を向いてぶつぶつ言っていた。

一樹たちがどうしたものかと考えていると、先ほど高倉と呼ばれた  
少女が動き出した。

「え、えと、焰…さん」

「……………なに」

「パッパフェの代わりになるかどうか分かりませんがシュークリームたたた食べませんか!？」

「……………」

虚ろな目をして少女をじいつと見つめる恭一、高倉のほうは恐怖でなのか恐ろしいほどに震えている。

「…もらっ」

ゆっくりとシュークリームの入った箱に手を伸ばし、一口食べた。

「…ッ」

食べた恭一はふつと顔を緩ませる。

黙々とシュークリームを食べる恭一、それをじつと見ている4人組。

「あ、あの…焰さん？」

「あ、えとあなたは…？」

「あつ、え、えとっ、た、高倉つゆき、雪音ですっ」

「そっ、今後ともよろしく。長く座らせたままでごめんね、帰ってよし」

「え」

恭一の『帰ってよし』に驚いて固まる雪音。

それを聞いて一斉に立ち上がる3人組。

「え、なんで高倉だけ!？」

「反省してるように見えない」

「なんで！？なんでよもう！？こんなことになるんだったらケチったお菓子持ってくるんだったわ！」

「………… お菓子なんかでは俺はつれないぞ」

「つれるよ！その間が証拠だよ！」

3人はもう説教は聞きたくないために何とか恭一を鎮めようとしたが、一向に恭一は首を縦に振らない。少しして3人が疲れたところを見計らい、恭一はさっきから思っていた疑問をぶつけることにした。

「そついや南はわかるがその2人は誰だ？高倉さんはさっき聞いたが」

「…そついや私たち…」

「…自己紹介していない」

「南、説明頼む」

「やっと出番かよ…」

一樹は3人をならばして順々に説明していった。

「まずこっちは東 沙希、昔馴染みの幼馴染だ」

「よろしく、…もうこんなことはやめてよ？」

「次に福家直也、小学校からの友人だ」

「…よろしく」

「そうか、じゃあもう帰れ。今度お礼の品を持ってくるように」

恭一はうんざりした顔で一樹たち4人をたたき出した。

「ううゝご飯食べさせてくれるって約束なんですよ？」

「仕方ねーだろ…あんだだけ怒らしたんだ、仕方ない」

「うう、私ご飯の準備何もしていないんですけど…」

「そりやまずいな…どーすっかなー恭一が作ってくれるんならいいんだけどなー」

「…これだけ待たされたのに何もなしとは…」

「……っ！」

ドアの向こうからずっと聞こえる声に観念し、恭一はドアを開け言った。

「…作ってやるから、食ったら帰れよ」

これから4年間、こいつらと一緒にいるのか、と少し神様に恨みながら、恭一は

何を作るのかと思いつながらキッチンへと歩くのだった。

## 第一話 少年、転校する。 1 - 4 (後書き)

やっと一話終了です。初めまして、赤流星と申します。

これ一話書くのに1か月くらいかけてることにマジ泣きしてます

(これ締切守れるんだろうか…)

まあこれから話も面白くなっていくと思いますので、楽しみに！  
それでは次回予告

そんなこんなでやっと入学、通常授業も始まったんだが内容が結構難しい！本気でやっていけるのかと思っていると、南の馬鹿が何かトラブルを起こしたようで…

えっ？俺と戦えと？なんで格闘マンガみたいなノリで話し進んでるの？

だれか俺に説明を！！

次回 白銀の翼 第二話

少年、変身する。

お楽しみにっ！

## 第二話 少年、変身する 2 - 1

「わからない…」

恭一は唸っていた。

入学して2日目、通常授業も始まり勉学にいそしむ恭一だったが…

（内容が全く分からん…なんだよ粒子の格子状構造体になるための条件って）

恭一は現代を生きる少年ではあるが、住んでいたところは化学などとは全くの無関係。

むしろ農業や生物などを授業で重点的にやっていたので、化学、しかも最新技術の説明を求められても無理というものだ。

「焰恭一君。解けないかい？」

「…はい、すみません」

科学の担当教諭、角田教諭に問われても謝罪の言葉しか出てこない。

数学や国語はなんとかついていけるレベルであったが、化学にはお手上げ状態の恭一。

「まあいい、もう時間なので授業を終わる。挨拶」

「起立、ありがとうございます」

授業が終わると同時に机に倒れこむ恭一

「最悪だよまったく…」

「恭一、化学できねーの?」

さすがの恭一の状態を見て、一樹も心配な表情をしながらこちらを見る。

死んだ目をして口から白いナニかを吐き出しながら黄昏していたら誰だって心配するだろう。

「できん、それも全くだ」

「じゃあさ、俺が教えてやろうか? 報酬は今日の夕飯」

「ちゃっかりしてんな全く……仕方ない、何がいいんだ?」

背に腹はかえられない、そんな言葉を思い出しながら仕方なしに一樹に聞こうとしたとき……

「あら恭一、南は化学できないわよ?」

「え……」

最近友人になった沙希がぽつりとつぶやく、一樹は慌てて沙希の口をふさごうとするが時すでに遅し。

「……やっぱいいわ」

「ああ!! そうゆうなよきょういち!!」

「俺はお前専属のコックじゃない! 食事くらい自分で作れ!」

涙目になりながら頼む一樹を振り切りながら恭一は教室を出た。足早に寮に帰り買い物袋を用意、今月の食費を入れた財布を持ち、恭一は買い物へ出かけた。

「まったく……ほぼ一人暮らしなんだからちゃんと家庭的なスキルを覚えろって言っているのに、なんであいつは……」

「おう恭一！今日は魚、いいの獲れたぞ」

「ああ、あとで買いに来る」

今月は入学するのでいろんなものがあるかもと結構な金額を用意してきていたのだが、隣人の襲撃に会い冷蔵庫の中身が早くも底を尽きかけていた。

あの3人組を鬱陶しいとは思っているものの、強く言い返せないのは彼がお人よしだからなのかもしれない。

「うーん……なやむなあ……」

自分の母、優子はずっと研究所に居座ることが多く家事をしに家に帰ってこない。

自分の2歳違いの姉・焰　夏樹は大雑把な性格であり、家庭的なこととはぜんぜんであつた。

そして自分の1つ下の雪音は問題外、なので必然的に恭一が家の家事を任された。

最初のころは失敗ばかりだったがぐんぐん成長し、今では大抵のことは自分でやるようになった。

そのことに彼は何も不満を口に出さなかったが、考え方が主婦のそれと似てきたことが彼の悩みの種である……

「おっ 同じ値段で2こ多い、買いだな」

小さいころは近くの八百屋などでたむろっているおばさんたちの井戸端会議などに潜り込んでいたり、何個かサービスなどとしてもらったことを思い出した。

「米が通常の10%引き……買ったほうがいいのか？」



いつしか家族全員の通帳を渡され、「そこから生活費とお小遣い出せばいいから」と母に言われたこともある。家のことをまだ7歳の子供に頼む母親というのもなかなかないだろう。

「今日の買い物はこれくらいでいいかな」

中学に入るところには恭一は立派な主夫として仕事をしていた。

実際一般的な家庭的スキルなら同年代で敵う相手はいないだろう。

恭一は今週分の食糧を買って寮へと帰る。

あたりが少し暗くなってきた頃、歩道を歩いていた恭一は近くで複数の人間の怒鳴る声を聞いた。

声のもとはいり組んだ路地の奥から、恭一はダメだと思いつつもゆっくりと足を運んだ

第二話 少年、変身する 2・2（前書き）

更新長くなっちゃった・・・

ゆるしてくんさいww（テヘペロ

## 第二話 少年、変身する 2・2

恭一はゆっくりと夜の路地を通ってゆく。ほそぼそしか聞こえてこなかった喧騒が

大きくなるにつれて道は細くなってゆく。

行き止まりまで差し掛かった時、大声を出している集団を見つけた。

「あなたたち！こんなことをしていいと思っているの！？」

「うるせえな、ババアには興味ねえんだよ！用があるのはそっちでな」

「ババアですって！？私はまだ32よ！」

「……………」

そこにいたのは白衣を着た科学者風な女性とそれを囲む数人の男、そして少し異質な少女だった。

（あの子髪やら目やら全部銀髪だ…都会にはあんな髪色の人もいるのか…）

って、そんなこと言ってる場合じゃないな…）

自分の母と姉に謝罪の言葉を心の中で念じ、恭一はゆっくり歩いて男たちに近づく。

男たちはこちらに気づかないのか、向こうの女性と言い争っている。路地の向こうにおいておいた食材には生もの（特に心配なのが卵）を置いてきてはいるが

これからどうなるかわからない。

さっさと帰るため、恭一は強硬手段に出ることにした。その方法は…

「おーい」

「…ん？なんだてめ「邪魔」ぶげらっ」

恭一の出した答え、それは”とりあえず全員殴る”だった。  
下手に言葉を交わすよりもこの方が今はてっとり早く済むからだ。

「なんの理由があつたか知らんが女子に手を上げるとは情けない奴らだな」

「…なんだとおっ!？」

恭一は腰を落としゆつくりと構える。

「きな、ちよつと今立て込んでるからさっさと終わらせたい」  
「やろっ…ぶっ潰してやらあ!」

男たちが一斉に恭一に躍り掛かるが、恭一は何とか男たちを沈めてゆく。

(きゃー！！怖いー！！きゃー！！)

内心怯える恭一、それもそのはず。恭一は喧嘩など全くやったことのない。

ただの一般市民なのだ。昔もこのようなことが何度かあったが、その時は

足でなんとか解決した。だが今回は状況が違う。

さすがに女性二人を背負い買い物袋をぶら下げ、そのうえ走るとなると

限界がある。

「うりゃー!」

「ギエピッ!」

「み、道はできた、あとは…ってあれ？」

ある程度相手にダメージを与えられたため、このまま二人を誘導して逃げるかと思い

二人がいた方向を見てみると、そこには誰もいなかった。

「さっきの騒動で逃げたのか…よかった」

「そうかい…そいつはよかったなあ…」

「え…？ぬわ！」

恭一が急いで振り向いたそこには、巨大な剣を振りかぶる男の姿が。

「で、デバイスう！？」

「しねえー！」

巨大な剣が振り下ろされるが、恭一は体をひねり何とか回避。そのまま逃げだした。

「待てこらあー！」

「そう言われて止まった馬鹿を見たことある！？」

帰り際に買い物袋を回収し、夜の街を全力疾走する恭一。

デバイス持ちの男との鬼ごっこは夜が明けるまで続いたのだった…

~~~~~???サイド~~~~~

「ふう…あの少年には悪いけど、何とか逃げ切れたわね…  
そっちは大丈夫? 『銀』」

「……………」

「……………銀?」

「……………見つけた」

## 第二話 少年、変身する 3 - 3

「ふうー…、昨日は疲れたあ…」

恭一は教室の自分の席でため息をついた。

昨日は大変だった。あの後なぜかフォトンデバイスを持っていた男に追いかけられ続けた。走り続けてやっとまけたと思ったら今度は全然知らない道。

何とかセラフィムのナビゲートと自分の記憶（うる覚え）を頼りに進むと

さっきの男とバッタリ遭遇、また走って逃げだす。という工程を3回ほど繰り返した。

ちなみにその時買い物袋にダメージを与えてしまい、卵は全滅した。

「焰君おはよう…なんか元気なさそうだけど…大丈夫ですか？」

「ああ…えっと…高倉さん？」

「はい、高倉雪音です、おはようございます」

「ん…おはよう…ふああああ…」

頭の中で眠気と壮絶な戦いを繰り返している時、雪音がゆっくりと教室へはいってきた。

恭一は、もう学校が始まって数日だが、まだ名前を覚えきれていないなと思いながら挨拶を返す。

雪音は鞆を机に置き教科書などを机に入れながら恭一に尋ねる。

「夜更かしですか？」

「いんや、ちよつと鬼ごっこを」

「？」

「あー…いや、気にしなくていい」

欠伸を噛み殺しながら窓を開け外を眺める。

そこにはまだ咲き誇る桜の花とちらほら歩いてくる生徒。春特有のゆつたりとした温かい陽気に包まれ、また眠気が襲ってくる。

ゆつくりと外を眺めながら、向こうの友人たちも頑張っているのかなと、思う恭一

雪音はそんな恭一の姿を見て、

「焰君つておじいさんみたいだね」

「んー？」

「縁側でお茶と羊羹出してなごんでそう」

「…よく言われるよ」

ゆつくりと目を閉じ、微かにだが穏やかな寝息を立て始める恭一。雪音は鞆に入れていた寒い日用のタオルケットを取出し恭一に羽織らせる。

朝五時半の出来事であった。

その時…

「おっはよーうきよーいちー！」

恭一はいきなり聞こえた叫びにいらいらしつつも目を開け、声のするほうを見る。

「馬鹿を友達にした覚えはありません」

「ちょ、朝っぱらからバカ呼ばわりはないだろうよ」

「字が違う、バカじゃなくて馬鹿だぞ、南」



恭一の友人、一樹だった。彼は見るからに軽そうな鞆を机に置き、恭一に話しかける。

「なーなんで昨日寮にいなかったんだ？」

「あー…鬼ごっこ」

「？…まあいいか、今度からはやめてくれよ　寮長ごまかすの大変だったんだぜー？」

「あ…消灯時間までに帰らないとダメなの忘れてた…」

「今度からはやめてくれよ？」

「はいはい」

恭一は返事をしながら、今日も楽しい日になるのだろうか、とふと思った。

今日も一日が始まる。だがこの日、恭一の運命は大きく変わるこ  
とになる...

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6005v/>

---

白銀の翼

2011年11月17日19時21分発行